



## タレント 森下千里さん

グラビア界では他と一線を画す自身のスタイルを確立し、絶大な人気を誇っているタレント・森下千里さん。テレビでの活躍も幅広く、出演番組は多岐にわたっている。実は写真に写ることが嫌い！？という驚きの発言もまじえつつ、森下さんの写真に対する熱い思いを存分に語っていただきました。今回は撮られる側からの視点でもたくさんお話いただいたので、女性を撮る機会のある方はとくに必見！

### プロフィール

もりした・ちさと。1981年愛知県生まれ。グラビアアイドルとして活躍する他、バラエティ番組、ドラマ、映画、舞台出演など幅広く活動し、マルチな才能を発揮している。

主な出演作に、バラエティ番組「志村けんのカバ殿様」（フジテレビ系）「特命リサーチ」（日本テレビ系）「シャル・ウィ・ダンス？」（日本テレビ系）など。ドラマ「仮面ライダー龍騎」（テレビ朝日系）など。舞台、志村けん一座「志村魂2」など。

また、「バルコ2003水着キャンペーンポスター」などでも活躍。

現在の出演中の番組「ロンドンハーツ」（テレビ朝日/毎週火曜日21時～21時54分/準レギュラー出演中）「熱闘！ゴルフ向上委員会」（テレビ東京/毎週土曜日11時～11時30分/レギュラー出演中）「TA☆RO」（中京テレビ/毎週金曜日24時50～25時20分/レギュラー出演中）。

## Beginning 出会い

### 撮る専門！カメラから逃げ回っていた学生時代

今回S200を使って撮影していただいたのですが、使い心地はいかがでしたか？

液晶画面も大きいし、手ぶれ補正もついてるのでとても使いやすかったです。あと、小さいのでポケット入れられるのがいいですね。カメラって持ち歩いていても、鞆の底に入っていたら意味がないと思うんです。鞆を探っている間にシャッターチャンスって逃げていってしまうので。そういった意味でも、ポケットに入れていて撮りたいときにすぐ撮れるというところが嬉しいですね。

ありがとうございます。写真をはじめたのはいつ頃だったのですか？

自分のカメラを持ったのが5年前ですね。ちょうどデジタルカメラが一般的に普及して来た頃に、私も気軽に撮影を楽しみたいなと思ってコンパクトのデジタルカメラを買いました。

写真に興味を持たれたのは、やはりお仕事で接する機会が多いからでしょうか？

いえ、写真を撮ること自体は昔から好きで、学生時代からレンズ付きフィルムで撮影を楽しんでいました。とにかくシャッターを押すのが楽しかったですね。友達を撮った写真は本当にたくさんあります。見返すと意味のない写真も相当出てきますけど（笑）。昔から私は完全に撮る側の人間で、自分が撮られることに関しては逆にとても苦手で嫌だったんです。

撮られるのが嫌いなんですか？森下さんはグラビアのお仕事もたくさんされていると思うのですが。

はい（笑）。なんで自分が撮られる側にいるのか不思議なくらいです。同級生に「なんでその仕事にしたの？写真嫌いじゃなかったっけ？」って聞かれるくらいです。学生の頃は写真を撮られる状況になると、写らないように逃げたり、写ったとしてもしかめっつらでした。それくらい写真に写ることが嫌だったんです。たとえば、修学旅行にはフォトグラファーさんがみんなのスナップ写真を撮るために同行してくれますよね。でも「写真撮りますよー」って言われると逃げ回ったり、人の影に隠れたりしました。卒業アルバム用の写真を撮るときは私があまりにも笑わないので、フォトグラファーさんが困ってしまって、ぬいぐるみを持って来て笑わせようとしたり。でも逆にますます笑えなくなってしまったなんて思い出があります。

学生時代の写真を見返すと、みんな仏頂面で写ってしまっているわけですね。

そうなんです。どの写真もほとんどが不機嫌そうな顔で写っているんです。だから、その頃の写真を誰かに見せると、「昔は悪かったんでしょ」なんて誤解をされることも多々ありますね（笑）。

## Pleasure 楽しみ

### 撮られる側の醍醐味 シャッター音は快感を呼ぶ！

撮られるのが嫌いな森下さんが、今ではお仕事で撮られる側であるわけですが、どんな心境で臨まれているのですか？

はじめの頃は恥ずかしかったし、笑えないから笑顔の練習をしたこともありました。でもそのうち笑わなくてもいいやという道に走ってしまったんです（笑）。私はわざと笑うのが嫌で、ニコパチ（モデルを撮影すると際、ニコッと笑ったところを撮影すること）も好きじゃないんです。基本的にグラビア写真は笑顔の方が好まれるのかもしれませんが、私は笑顔でなくてもいいと思うし、自分の気持ちも隠さなくていいんじゃないかって思っています。

フォトグラファーさんの要求に応えるというよりは、自分の感情を素直に写真に反映させていくのですかね。

はい。ムリに笑って撮ってもらっても、結局仕上がった写真を見れば本当の笑顔か、嘘の笑顔かは分かっちゃいますしね。写真は心を写し出すもの。だから被写体としての私の基本姿勢は、自然体でいるということですね

良い作品づくりをする上ではフォトグラファーさんとの相性も関係あるのでしょうか。

もちろん相性のいい、悪いはありますね。でもこの人とは合わないから、いい結果が得られなくても仕方ない、などは思わないようにしています。私は、どんなフォトグラファーさんとも「この人とはできない作品がある！」と思って臨んでいます。

テレビや映画で使われるムービーカメラとスチールカメラでは、撮られる側として何が決定的に違うと思われるですか？

一番はシャッター音がつくり出すリズムがあるか、ないかですね。スチールカメラはシャッターを切る音で撮っているか撮っていないかが分かるので、ONとOFFが明確。そのリズムがいいと褒められている気がして、撮られる側も気分が乗ってくるんです。これは一般の女の子でも当てはまると思いますよ。極端なことを言えば、本当にそのリズムがよければ脱ぎますね（笑）。一眼レフ



カメラの「カシャッ！」っていうシャッター音は、それくらいすごい力があるんです。

「いい写真になりそう！」という手応えは撮られた瞬間にわかるものですか？

わかりますね。フォトグラファーさんと息が合った瞬間のカットは、やっぱり仕上がりを見てもいいですね。極端なことをいうと撮影する前に分かることもあります。その日の自分のコンディションや心持ち、ロケーションやスタッフとのコミュニケーションの雰囲気などで、「今日はいい作品が撮れる！」と感ずることもあるんです。

いい写真を撮るにはシャッターを切る瞬間だけが大切というわけではなく、いろいろな要素が関係してくるのですね。

すごく関係しています。写真に写るのは私だけですけど、メイクさんやスタイリストさん、フォトグラファーさん、他にもたくさん関わっている人達がいてやっと1枚の写真ができる。いろんな力が集まって作り上げていくものなので、いい写真を撮るためには、その分たくさんの要素がうまく合致する必要があるんです。一見するだけじゃわからない部分ですが、そういったことも踏まえてグラビア写真を見てもみるのも楽しいと思います。

では、森下さんが撮る側に立ったときに大切にしているポイントなどはありますか？

具体的なことで言うとなるとなるべくフラッシュをたかないことですね。フラッシュをたいた感じが好きではないんです。それ以外は.....とくにないですね(笑)。ポケてもブレても気にしない。きちんと撮ろうという気持ちはなくて、とにかく何か面白いものを見つけたらシャッターを切っているという感じなんです。私の場合は、特別どこかへ行って絵になる風景を撮影するよりも、生活の中の1コマを絵にすることによって面白さを感じるんです。普段の何気ない場面も絵として意識し写真に撮ることで、その景色を再確認でき、楽しめるような気がするんです。

## Photo's 作品紹介

### 森下さんが捉えた 愛すべき日々の1場面



中日劇場、舞台「志村魂」にて。腰元さんの後ろ姿。



雑誌の撮影で埼玉の湖巢(吹上)に行った際、線路下から撮影。



ロケ先で撮った電車のある風景。



徳島阿波踊りのイベントに出演した際、撮った写真。



24時間テレビで愛知県の蒲郡へ行った際の1コマ。  
釣れたばかりのカジキに遭遇！



24時間テレビ、蒲郡の控え室（オープンカフェですが）。疲れて眠っている？スタッフさん。

## Future これから

### 撮る側と撮られる側 それぞれの魅力

森下さんにとっての写真の魅力についてうかがいたいのですが、まず撮る側としての魅力は何だと思われますか？

写真を通して日常の楽しみ方が見つけられるところですね。日常を撮ることで、生活していることが楽しくなってくるんです。たとえば辛い1日だったとしても、たった1枚でも面白い写真が撮れていたら「今日も面白かったな」って思えるんです。

お持ちいただいた写真からも、楽しい、面白いという雰囲気がすごく伝わってきました。

ありがとうございます。上手に撮るうというよりは、そのときの空気感を大切にしたいと思って撮っているんです。写真にうまい、へたはもちろんありますけど、私にとっては重要ではありません。シャッターチャンスをつかむことができるか、という点に集中して撮っています。

それに、普段の生活を写真にすることで、自分の過ごした時間に愛情が持てる気がするんです。悪い日でも良い日でも振り返るのは素晴らしいことだなと思います。

では、撮られる側としての写真の魅力は何だと思われますか？

被写体である私も含め、みんなでひとつの作品を作り上げていく過程が魅力的ですね。仕上がった1枚の写真はもちろん素晴らしいんですけど、そのベストな1枚をつくるためのエネルギーにあふれた現場も好きなんです。



モデルとして撮影されて誌面を飾り、多くの人に認知される喜びということではなく、多くの人と力を合わせて写真を作り上げていく作業を楽しんでいるんですね。

はい。1枚の写真をつくるまでの撮影現場はとても面白いですね。たとえばスタイリストさんだったら、今日のフォトグラファーさんは絶対に風を使ってくるから、風になびく衣装を選ぶ、メイクさんだったら衣装に合わせた色味を使う、私は風になびく衣装をキレイに見えるようなボーリングをする。衣装が活きることで私自身も活きる。そういったことを考えると面白いし、楽しい。パズルゲームみたいな感覚なんです。いろいろな選択肢からベストなものを選び、それらを総合した上で最高の瞬間をカメラに収めて1枚の写真ができるんですね。皆さんの目に触れる時点では、私の写真と捉えられるかもしれませんが、でもそれはたまたまモデルが私であったというだけ。私も写真をつくる多くの要素のひとつなんです。

森下さんがモデルであっても、森下さんの作品という意識ではないのですか？

スタッフ全員のものです。私が一番嫌だなと思うのは、たとえば写真集を出してそのピーアール広告を雑誌などに出した際に、フォトグラファーさんやメイクさん、スタッフさんの名前が載らないことなんです。それがとても悔しい。グラビア写真というと、どうしても水着を着たお姉ちゃんというイメージですが、私としてはひとつの写真作品だと思ってやっていますし、私の写真集でもありますが、スタッフ全員の写真集でもあると思っています。

なるほど。お話を聞いていると、写真自体をととても愛している感じが伝わってきます。これからの活躍も期待しています。

ありがとうございます！

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.